

## 明治期以降曹洞宗人物誌(二)

### 川口高風

はじめに

本稿は「愛知学院大学教養部紀要」第五十四巻第四号(平成十九年三月)に所収の拙稿「明治期以降曹洞宗人物誌(一)」の続編で、「あ」項の続きである。全項の人物誌が完成した時は『近代曹洞宗人名辞典』と題して刊行する予定で、一日も早い完成をめざしている。しかし、集中力と精力をかなり費す仕事のため、自分の生命があるうちに完成できるか心配している。何とか無事刊行できるように精進したい。

### 凡例

#### 〔見出し項目〕

- 一、収録人物は明治期以降の顕著な業績を示した人物で、既没者のみを採用した。
- 二、見出しの人名は当時用いた旧漢字とした。事歴の本文は新字体を用いたが、旧字体を使用したものもある。

- 三、見出しの項目はかな見出しを太字で示し、次に漢字を掲げた。
- 四、かな見出し項目は姓と名の間にはダッシュを挿入して読みやすくした。

#### 〔見出し項目の配列〕

- 一、五十音順に配列した。
- 二、同音同字の漢字項目は時代順(没年順)に配列した。
- 三、同音異字の漢字項目は第一字目の画数の少ないものからの順とした。また、第一字目が同画数の時は第二字以降の画数の少ないものから配列した。

#### 〔本文の記述とその順序〕

- 一、本文の記述は敬語、敬称の使用を避けた。
- 二、収録にあたっては居住地、号、字、生年月日、父母、誕生地、受業師、本師、学歴、僧堂安居歴、宗門役職歴、社会的職歴、著作類、示寂(没)年月日、行年、参考文献の順とした。不明な場合は記していない。
- 三、編集するにあたり、基本的には直接、居住地に問い合わせした返書にもとづいて執筆した。それ以外に参考とした文献は末尾に掲げた。
- 四、伝記中の元号の一番最初(初筆)に西暦を入れた。ただし、伝記中の生没年には西暦を入れない。
- 五、寺院の所在地は平成の大合併による新市町村名への変更は行っていない。
- 六、居住地は歴住の順序通りでないものもあり、何世か不明な場合は記していない。

あかまつーじたん 赤松慈潭

一 昭和十六年(一九四一)

大田市栄泉寺二十二世。号は刻舟。兵庫県に生まれる。受業師、本師は和田慈穩。関市龍泰寺や京都建仁寺に安居し、竹田黙雷に参随した。宗務支局長、宗務所長、邇摩郡保護会長などを務め、昭和十六年八月三十日に六十六歳で示寂した。〔現代仏教家人名辞典〕

あかまつーぶつかい 赤松佛海

一 昭和三十年(一九五五)

岡山県小田郡禅源寺二十八世、井原市善福寺三十一世。号は為船。広島県に生まれる。受業師、本師は赤松正道。赤松月船、赤松暁三に参随した。昭和六年(一九三一)四月に長田暁玄とともに『洞松寺住職後任候補植田即法師辞退要求理由と事情並意見』を著わす。地方布教部委員長、後月那仏教会長などを務め、昭和三十年九月二十八日に八十五歳で示寂した。〔現代仏教家人名辞典〕

あがわーだんでい 阿川断泥

天保五年(一八三四)―大正四年(一九二五)

徳山市興元寺二十五世、徳山市保安寺十三世、山口市福厳院十七世、山口市泰雲寺独住一世、鹿児島県福昌寺、萩市亨徳寺十八世、信州長国寺、杵岐華光寺二十七世、福岡県龍国寺。号は卍鏡。姓は滝ともいう。天保五年十一月一日に徳山藩毛利家の家臣の家に生まれる。受業師は興元寺の黙淵、

本師は祖学黙禪。龍海院の突堂にも参随している。弘化二年(一八四五)の夏、興元寺に首先安居し、嘉永二年(一八四九)四月から翌年夏まで江戸駒込の梅檀林に掛錫した。安政四年(一八五七)五月に保安寺に首先住職、文久元年(一八六一)十二月に福厳院へ転住し、明治三年(一八七〇)十二月に泰雲寺へ住職する。明治十年に第一次末派総代会議員を務め、十二年十月に鹿児島県の福昌寺に住職した。十四年に第二次末派総代会議員を務め、十五年七月に興元寺、二十一年四月に亨徳寺、二十七年二月に長国寺に住職し、二十八年に『周防

龍文寺三世中興器之為禪師行巻』二巻を刊行した。三十三年四月に杵岐華光寺に住職する。總持寺の侍者、後堂を務めた。

『参同契宝鏡三昧解』を出版しており、興元寺で大正四年一月十六日に八十二歳で示寂した。〔曹洞宗名鑑〕、『龍国寺歴住世代記録』、橋本隆哉「諸嶽山版坐禅用心記并三根坐禅説不能語の再版と阿川断泥和尚」(『宗学研究』第十六号)

あきなりーけんどう 秋成賢道

天保二年(一八三一)―明治三十一年

(一八九八)

岡山県苫田郡宝樹寺八世、岡山県久米郡円通寺十六世。号は獨明。天保二年十月二十日に大分県西国東郡羽根村の秋成茂右衛門の三男に生まれる。受業師は守謙、本師は隆瑞。龍海院の突堂に隨身し、江戸駒込吉祥寺学寮で修学した。教導職試補、權訓導に拜命され、天保十二年(一八四二)十月十七日に大分県国東郡宝泉寺の守謙について得度し、十四年冬に大分県速見郡の長流寺住職孝天の初会に入衆した。安政元年

(一八五四)三月より同四年七月まで龍海院の奕堂に隨身、四年冬に大分県宇佐郡定林寺の丹法の初会で立職、五年十二月十九日に大分県速見郡の宝福寺の隆瑞の室に入つて嗣法、六年八月十三日に永平寺で転衣し上京する。六年九月より慶応元年(一八六五)十一月迄駒込吉祥寺学寮において修学し、慶応元年十一月二十日に円通寺へ住職し、明治九年(一八七六)七月十九日に宝樹寺へ転住、十年夏、同寺において初会結制を修行した。三十一年九月二日に六十九歳で示寂している。

あきのーこうどう 秋野孝道

安政五年(一八五八)ー昭和九年(一九

三四)

總持寺独住第七世、天徳院、大洞院、可睡齋に住職する。号は大忍。禪師号は黙照円通禪師。安政五年四月十八日、静岡県榛原郡相良町浪津の秋野新七の三男に生まれる。受業師は伊藤慶道、本師は加藤玄裔。明治十二年(一八七九)浜松市天林寺専門支校に入る。十三年に同支校の学監とな

る。十五年十月二十五日には駒込吉祥寺内の曹洞宗大学林専門本校に入学し十九年に卒業した。西有穆山に就て、十三年間『正法眼蔵』の研究を行った。二十二年四月十三日に天徳寺、四十年七月二十九日に大洞院、大正五年(一九一六)六月十三日に可睡齋などを歴住し、昭和四年(一九二九)十二月四日に總持寺の貫首に就任した。明治二十三年には天徳寺認可僧堂を開単し、曹洞宗大学林学監、静岡県第一号訓導取締、静岡県甲号総教会展長、続洞上聯燈録編纂材料蒐集委員、第五区末派総代正員議員、第三中学林監理、大学林教頭、曹洞宗大学総監代辨、同大学林長代辨、曹洞宗議會特選議員、曹洞宗教育會議員、永平寺後堂、眼蔵会講師、曹洞宗大学長、總持寺西堂などを務めた。著作には『禅宗綱要』

『教授戒文纂解』『五位要訣』『禅の安心』『正法眼蔵聴講筆記』『坐禅箴・三根坐禅説講話』『坐禅用心記』『參同契』『宝鏡三昧』『從容録』『雪竇禪師頌古称提』『般若心経』『普勸坐禅儀』『碧巖集』『曹洞宗意』などの講話、『正伝三昧の大意』『洞上

安心の妙訣』『禅学入門』『禅戒の大意』『此処に道あり』『修養禅』『味禅の活用』『禅の骨髄』『禅の要諦』『徹底禅』『黙照円通禪師語録』などがある。昭和九年二月二十日に七十七歳で示寂した。(『大乘禅』第十一卷第四号、大塚洞外『秋野孝道禪師略繪傳』、『曹洞宗名鑑』、『總持寺誌』)

あきひらーとくじょう 秋平徳乘

明治四年(一八七二)ー昭和三十四年(一九五九)

兵庫興禪寺十四世。号は大運。明治四年一月一日に兵庫県養父郡出石町の中島家に生まれる。受業師、本師は秋平改禪。二十二年(一八八九)に洞仙寺の小出海心初会に入衆、二十五年に養源寺の紫安石雲の隨意会にて立職、同年、秋平改禪に嗣法。三十三年、永平寺に瑞世。明治二十年には兵庫県の聯芳学林に入学し、その課程を卒へて曹洞宗大学林に入学。三十五年に卒業。三十九年に内地留學生に選拔せられ宗乗を専攻し、同年に興禪寺へ住職した。初会結制修行後、第三中学林教授となり、台湾布

教師にも就く。昭和三十四年十二月十五日に八十九歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』)

あきやまーごあん 秋山悟庵

文久三年(一八六三)ー昭和十八年(一九四三)

上越市真慶寺三十三世、上越市賞泉寺二十世、上越市顕聖寺三十三世。号は雄道。文久三年九月一日に新潟県東頸城郡安塚村石橋の秋山新左衛門とキセの次男に生まれる。受業師は単道雄傳、本師は諦応良観。

信州長国寺の鶴沢古鏡にも参随した。哲学館の井上円了、村上專精の下で学び、さらに三宅雪嶺、新渡戸稲造とも親交した。明治三十八年(一九〇五)十二月には現代名家の武士道に関する時局講話や論説、日露戦争に関する時局講話や評録し、将来の国民道徳教育に役立つものとした『現代大家武士道叢論』を編集したのをはじめ『禅と武士道』、『禅と修養』、『坦山和尚全集』、『力ある修養禅林講話』、『奥義解説禅学講話』、『青年と禅』、『和訳聖典十種』、『禅と英雄』、『禅の簡易生活』などを著わした。

大正五年には顕聖寺へ帰り、顕聖寺僧堂で雲衲教育に尽力した。十一年には本師の後任として賞泉寺二十世の法燈を継ぎ、昭和五年には顕聖寺三十三世に昇住し僧堂の運営と教育に努め、昭和十八年九月六日に八十一歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』、川口高風『明治前期曹洞宗の研究』)

あきらーりようざん 明楽梁山

ー明治四十年(一九〇七)

益田市妙義寺二十五世、島根県浜田市禅床院十三世。号は洞屋。本師は瑞香梅山。曹洞宗議員を務め、妙義寺の本堂屋根替、千休地藏及びその堂宇、山門などの建立を行った。犬養毅とも親交があり、禅談を交していた。明治四十年一月二十九日に示寂した。

あくらーしゅうえん 阿蔵秀寅

明治二十七年(一八九四)ー昭和三十五年(一九六〇)

静岡県磐田郡玖延寺二十世、静岡県周智郡極楽寺二十一世、二十四世。号は大峰。明

治二十七年八月二十一日に愛知県海部郡富田村字千音寺の横井林右エ門の三男に生まれる。受業師、本師は阿蔵寛宗。横井恵超に参随した。昭和三十五年五月十日に六十五歳で示寂した。(『玖延寺歴住世代帳』)

あけみーじせん 明翫慈船

安政六年(一八五九)ー昭和十六年(一九四一)

神戸市北区光明寺十世、福井県坂井郡正瑞寺、滋賀県高島郡宝光寺、大津市葛川村桂昌寺。号は洞嶺。安政六年二月三十日に福井県丹生郡白山村の寺尾久太夫の二男に生まれる。沙弥戒を満岡慈舟に受く。受業師は山田全牛。本師は明翫大俊あるいは山田秀全。明治四年(一八七二)冬、今立郡高瀬村の宝円寺高瀬聖道の初会に入衆。五年より九年迄、武生町龍泉寺の慈舟に随侍して、内外典を学習する。九年夏、近江國犬上郡里根村の天寧寺福岡涼琴について立職し、十年二月より十三年一月迄、彦根清涼寺の長森良範に随侍する。十三年二月より十五年二月迄、越前南條郡春日野村の西応

寺の上野瓶城に随侍し、二十一年八月より二十三年三月迄、近江高島郡朽木村の興聖寺橋本台嶺に随侍、三十年二月より三十二年二月迄、名古屋市東区安齋院の野々部至游に随侍。『曹洞宗大鑑』によれば、明治九年九月に山田秀全の室に入って嗣法し、同年九月、永平寺で転衣、十年七月、正瑞寺へ首先任職した。二十一年三月、宝光寺へ転住し、二十三年夏に初会結制を修行した。二十四年十二月、桂昌寺へ特選により転住し、三十二年六月、永平寺の推薦により光明寺に転住する。三十三年に兵庫県第一支局管内布教師、三十四年から大正三年迄、同県宗務所長、明治四十四年から大正十五年(一九二六)迄、同県布教教長を務める。昭和十六年五月二十三日に八十五歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』、「明翫慈船自伝」)

あさいーたいざん 浅井泰山

明治七年(一八七四)―大正七年(一九一八)

名古屋市熱田区月笑寺五世。号は積成。明

治七年八月十日に名古屋市中区打出に生まれる。受業師、本師は大島天珠。杉本道山、白鳥鼎三、鷹林冷生、信叟仙受らに参随した。二十八年二月に大島天珠に嗣法し、二十九年九月二十六日に永平寺へ瑞世、同年十二月に月笑寺へ住職した。愛知県派出布教師、組長、所長、宗会議員を務めた。大正七年十一月十四日に四十五歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』)

あさいーだいせん 浅井大仙

明治二十四年(一八九二)―昭和五十二年(一九七七)

名古屋市瑞泉寺三十三世、静岡県田方郡最勝院四十七世、薬師寺十二世、大泉寺寺号開山。号は無外。明治二十四年四月二十一日に名古屋市天白区天白町大字植田字北屋敷の浅井亀次郎と母ふじの長男に生まれる。受業師及び本師は浅井蜜成。明治三十八年(一九〇五)に高等小学校を卒業、大正元年(一九一二)七月曹洞宗第三中学校を卒業、六年七月曹洞宗大学を卒業し、曹洞宗宗乗研究生として引き続き在学した。

昭和五年(一九三二)最勝院の後席を継

ぎ、二十五年十二月十日に瑞泉寺に住職する。二十八年に名古屋市南区天白町に布教所を建立し、幼稚園も設立して大泉寺と寺号した。曹洞宗准師家、静岡県第三宗務所長、特派布教師、朝鮮布教師、總持寺顧問、總持寺授戒会の教授師などに任命され、五十年に曹洞宗大教師に補任され赤紫恩衣を許可されている。五十二年八月二十四日に八十七歳で示寂した。同日、總持寺より贈監院を受けている。(『曹洞宗現勢要覧』、浅井大仙・川口高風『鳴海瑞泉寺史』)

あさいーばいみょう 浅井梅明

天保元年(一八三〇)―明治三十一年(一八九八)

愛媛県瑞応寺二十四世、愛媛県新居浜市真光寺十二世、愛媛県今治市大雄寺二十六世。号は圓山。天保元年二月九日に愛媛県新居浜市一宮町に生まれる。受業師及び本師は瑞応寺十七世一兮満三。真光寺に住して瑞応寺歴代の会の役寮を務めた。明治十九年(一八八六)十月二十八日に瑞応寺へ

晋住し、同二十九年五月に退董して隠寮に入った。その間、掛搭の雲衲を提撕した。三十一年九月二日に示寂した。(『瑞応寺誌』)

あさいーみつじょう 浅井蜜成

安政四年(一八五七)ー昭和五年(一九三〇)

名古屋市瑞泉寺三十一世、薬師寺十世、全久寺法地開山、円道寺、金剛寺号開山。号は道本、安政四年三月九日に名古屋市天白区天白町植田の浅井善十郎の二男に生まれる。受業師は悟山哲心、本師は杉本道山。明治七年(一八七四)三月より十三年九月まで生駒円之、十四年より十五年まで鷹林冷生に随侍した。十七年三月、教導職試験に任ぜられ、十八年に愛知県第一曹洞宗専門支校卒業。三十六年十二月には師家、四十年、瑞泉寺開山五〇〇回忌に森田悟由、石川素重戒師の戒会を務めた。大正七年(一九一八)には小作争議の調停を行っている。開山堂、位牌堂、方丈、茶室を新築し、昭和五年五月二十日に七十四歳

で示寂した。(『曹洞宗名鑑』、浅井大仙・川口高風『鳴海瑞泉寺史』)

あさくらーしんりゅう 朝倉真隆

ー明治二十七年(一八九四)

福井県武生市盛景寺二十四世、瑞林寺十四世、禅興寺二世。号は紹嶽。福井県南條郡南條町清水村の伊兵衛の次男に生まれる。受業師及び本師は寿山益聳。天保五年(一八三四)十月一日に寛天寺の益従について得度し、安政四年(一八五七)冬、天徳院の奕堂の下で首座を務め、文久元年(一八六一)十二月九日に盛景寺の益聳の法を相続した。翌二年正月、永平寺で転衣し、元治元年(一八六四)五月十五日に瑞林寺十四世として住職し、明治三年(一八七〇)八月二十四日に盛景寺に住職した。禅興寺を法地開闢して自ら勧請二世となっている。二十七年一月十八日に六十二歳で示寂した。(山口正章『春日山盛景寺小史』)

あさくらーせつりゅう 朝倉雪立

明治三年(一八七〇)ー昭和七年(一九

三二)

福井県武生市盛景寺二十六世。号は寒巖。明治三年、福井県丹生郡織田町赤井谷の山岸弥左衛門の長男に生まれる。興泉寺の是禅について読み書き、漢字を学ぶ。受業師及び本師は守拙瓶城。比叡山、高野山などにも修学求道しており、いつも白ひげを長く垂れ、眼光鋭く無欲淡泊で檀信徒からの信望は厚かった。昭和七年十一月二日に六十二歳で示寂した。(山口正章『春日山盛景寺小史』)

あさくらーとうかん 朝倉透閑

ー昭和十七年(一九四二)

福知山市円浄寺五世、福知山市昌宝寺五世、舞鶴市即心寺九世、綾部市高台寺六世。号は普屋。京都府綾部市高津町の朝倉武左エ門の三男に生まれる。本師は大貫祖猷。京都府第四曹洞宗務所長を務め、円浄寺の本堂、庫裡再建に二千五百円を自附し、高台寺本堂再建をはたした。昭和十七年七月十六日に示寂した。(『現代仏教家人名辞典』)

あさだーこうがい 浅田高外

弘化二年(一八四五)―大正六年(一九一七)

秋田県由利郡竜門寺三十六世、本莊市松ヶ崎光禪寺、秋田県由利郡正眼寺三十三世、本莊市赤田長谷寺八世。号は慧雲。弘化二年五月二十五日に能登国羽咋郡富木村に生まれる。受業師は長野県大町市靈松寺の義順、本師は平等覚宗。萬延元年(一八六〇)夏に加州大乘寺に首先入衆し、その後、慶応元年(一八六五)まで六年間、總持寺に安居した。明治九年(一八七六)、秋田中教院にて試験を了畢し、十九年秋に大学林学課五級の證明状を受ける。慶応元年夏、山形県村山郡泉蓮寺の仙龍再会において立身し、翌二年秋、龍門寺の前住平等覚宗の室に入て嗣法する。同年八月、總持寺に瑞世転衣し、慶応三年に光禪寺へ首先住職し、明治元年に正眼寺へ、七年に長谷寺へ、三十五年二月に龍門寺へ昇住する。長谷寺時代に楼門、経蔵を新築し落慶式をあげたが、二十一年に烏有に帰した。しかし、二十三年より三十二年までに諸堂のす

べてを再建し、二丈六尺の大仏を建立している。宗務所長、組長などを務め、県下の事情をよく知っているとところから生きた秋田仏教史とも称された。大正六年七月二十九日に示寂している。(『曹洞宗名鑑』)

あさだーだいでん 浅田大泉

大正七年(一九一八)―平成七年(一九九五)

埼玉県東松山市浄空院二十七世、長野県飯田市増泉寺二十五世。号は月庭。受業師は浅田大宗。本師は今枝法宗。大正七年十二月十九日に長野県飯田市大瀬木の浅田大宗の長男に生まれる。駒澤大学専門部高等師範科国漢科を卒業し、永平寺に安居、沢木興道らに参随した。浄空院参禅道場師家、宗務庁書記、課長、管内布教師、青少年教員、宗門公認伊賀良保育園を開設し、同園長。養護施設慈恵園を創設、民生委員、保護司などを務めた。平成七年十月六日に七十六歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』)

あさのーぜんじょう 浅野善成

―明治三十年(一八九七)

新潟県南魚沼郡正眼寺二十六世。号は大器。濃州武儀郡関町の浅野家に生まれる。近くの正武寺で得度したと思われ、受業師、本師は不詳。正眼寺は幕末に本堂改築を起こすが、幕末の動乱や凶作、住職の急逝によって事業は停滞し、田畑の質入借金未の末に破産した。そのため雲洞庵の南木国定の命により、破産再建を旨として善成が明治九年(一八七六)三月十五日に入院し、借財整理、授戒会修行、大蔵経を購入するなど大いに活躍した。十五年九月に美濃関の正武寺へ行き、その帰路に信州松本の中教院下で新寺建立のことがあり、中教院の依頼を受けて徒弟五名とともに十六年六月に出立し、十月に正眼寺を退院した。三十年八月五日、長野県松本町の善光寺別当大勧進説教所にて示寂した。(『大応山正眼寺什物校割簿』)

あさのーてつぜん 浅野哲禅

明治三十年(一八九七)―昭和五十五年

## (二九八〇)

静岡県周智郡大洞院独住九世、掛川市最福寺三十四世、島田市普門院、袋井市香勝院、朝鮮郡山府錦江寺。号は大忍。明治三十年四月六日に愛知県海部郡八開村開治に生まれる。本師は河合椽音。大正十年に曹洞宗大学を卒業し、内地留学生として秋野孝道に参随する。永平寺教育係、宗乘研究学生、両大本山巡回布教師、両大本山京城別院院代、特派布教師、満洲派遣軍慰問布教師、朝鮮郡山府駐在布教師（錦江寺住職）、總持寺単頭、准師家、報国会指導講師、戦力増強教化練成動員執行補佐員講師、僧侶勤労働員適格者修練会講師、決戦報国会常会講師、第十二指定専門僧堂主（准師家）、両大本山特派布教師、教学審議会委員、駒澤大学同窓会評議員、大洞院専門僧堂主（准師家）、大政翼賛会常任委員、大日本戦時宗教報国会県支部顧問、内閣印刷局嘱託講師、帝国在郷軍人会郡支部副会長、帝国在郷軍人会町分会長、国民義勇隊郡別隊長、県戦後対策協議会委員、民主警察協議会委員、大日本報徳社特任講

師、町警察署顧問などを務める。喜寿祝賀として昭和四十八年十一月に『橋谷余韻』を出版する。昭和五十五年四月十六日に八十三歳で示寂した。『曹洞宗現勢要覧』『橋谷余韻』

あさのーふざん 浅野斧山

慶応二年（一八六六）—大正元年（一九

一一）

名古屋市天年寺十六世、茨城県稲敷郡管天寺三十一世、水戸市祇園寺二十二世、静岡県田方郡最勝院十三世。号は打睡庵、提鈿。慶応二年四月二十四日に名古屋市南鍛冶屋町の浅野束穂の三男に生まれる。受業師、本師は大島天珠。明治十二年（一八七九）四月八日、洗月院三世の天珠について得度し、それ以来、白鳥鼎三、鷹林冷生に随侍すること十二年間にわたり、十八年に法持寺の天珠の下で立身して、二十二年十一月三日に天珠の室に入って嗣法した。二十四年五月一日に永平寺で転衣出世し、二十六年三月に天年寺に首先住職した。二十八年に曹洞宗大学林へ入学し、三十二年七

月に卒業した。その後、内地留学生となり、京都へ行き浄土宗専門学院長大鹿啓成について俱舍論、唯識、因明などを学んだ。続いて東大寺戒壇院長老の上田照遍について華嚴、天台の講義を受け、京都では臨済宗五山の摂心会にも出席し橋本峨山、宮裡東昱らに参じた。三十五年八月には曹洞宗大学林教授に任ぜられ、「和融誌」「禅」などに多くの論稿を発表している。三十七年九月には管天寺に転住し、四十一年には祇園寺へ昇住した。四十四年六月には祇園寺開山東臯心越の遺稿を収集した『東臯全集』を刊行し、七月には最勝院へ転住した。その晋山記念として『妙高山最勝院縁起』、『最勝院歴代御伝記』を刊行、続いて『首楞嚴経』の五十魔境を説示した『禅病論』を著わした。綿密なる行持、博覧の学識は当代稀有の善知識といわれ、大正元年六月一日に四十七歳で示寂した。（川口高風「浅野斧山の伝記と論稿、著作」（圭室文雄編『日本人の宗教と庶民信仰』）



あさのーりようかん 浅野良閑

明治二十年(二八八七)ー昭和四十一年(二九六六)

輪島市蓮江寺三十一世、宮城県仙台市龍沢寺二十六世、宮城県仙台市宝船寺。号は蓮峰。明治二十年十一月二十九日に石川県羽咋市千代町に生まれる。受業師、本師は幕井宗閔。大正四年(一九一五)、曹洞宗立名古屋中学院を卒業し、八年には国学院大学を卒業して昭和四年(一九二九)まで仙台梅檀中学教員、總持寺祖院都寺及び講師を務める。大正六年に宮城県龍沢寺に首先住職し宗務所副所長、県社会教育講師、方面委員、小作調停委員、金銭債務臨時調停委員、町社会教育委員、県出征軍人遺族慰問教化講師、司法保護委員、金沢地方裁判所防犯協会委員、人事調停委員なども務めた。昭和二十一年より病床に伏し、四十一年八月十八日に示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』「葬儀用辞」)

あさひなーけんしゅう 朝比奈顕宗

明治二十年(二八八七)ー昭和二十七年

(二九五二)

埼玉県秩父郡正永寺十八世、静岡市浄元寺十九世。号は瑞巖。明治二十年五月十七日に静岡県志太郡焼津町鯛ヶ島の朝比奈喜平の子に生まれる。受業師は増田芳年、本師は丹羽仏庵。明治三十二年十二月八日、千葉県龍泉寺の増田芳年について得度し、四十一年三月に千葉県立佐倉中学校を卒業した。四十三年二月より四十五年二月まで永平寺に安居した。四十二年冬、静岡県洞慶院の増田瑞明について立職し、翌四十三年二月には洞慶院の丹羽仏庵の室に入って嗣法した。大正元年(一九一二)に浄元寺十九世に就いたが、三年十月に退董している。曹洞宗宗務所長、管内布教師、特派布教師、不老閣随行布教師、高祖大師七百回遠忌社会教化運動布教師を務め、その他、機業工場布教師、司法保護委員会常務委員、県仏教社会事業協会常務理事なども務めた。昭和二十七年十月二十日に六十六歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』「朝比奈顕宗履歴書」)

あさひなーしほう 朝比奈資芳

大正十五年(一九二六)ー昭和五十九年(二九八四)

埼玉県秩父郡正永寺十九世。号は佛印。大正十五年十月四日に静岡県清水市庵原の長沢虎吉の四男に生まれる。受業師、本師は丹羽廉芳。昭和二十五年(一九五〇)駒澤大学文学部仏教学科を卒業。二十六年まで永平寺に安居す。五十八年より曹洞宗宗務庁審事を務めた。五十九年八月二十一日に五十八歳で示寂した。

あさまーかんざん 浅摩喚山

嘉永五年(一八五二)ー大正元年(一九一一)

厚木市興教寺二十二世。号は春應。嘉永五年十月十日に神奈川県中郡豊田村の片倉作右エ門の次男に生まれる。受業師は知道能忍。明治四年(一八七二)津久井郡津久井村の功雲寺にて立職し、大正元年十月十二日に示寂した。

あさましゆんえい 浅間俊英

一明治二十二年(一八八九)

米沢市林泉寺五十世、米沢市桃源院十八世。号は月山。俳人でもあり、明治二十二年四月十三日、米沢市岩松院にて示寂した。

あさまきーぜつけい 麻蒔古溪

一 天保六年(一八三五)―大正七年(一九

一八)

愛知県渥美郡長興寺独住二世、静岡県周智郡大洞院独住一世、愛知県豊田市広済寺二十五世、豊田市祐源寺十四世、埼玉県北葛飾郡迦葉院十五世。号は浄山。天保六年正月十九日に愛知県に生まれる。本師は超光陽宗。能本山東京出張所副監院、永平寺東京出張所監院、明治十一年(一八七八)三月二日の二代尊六百回大遠忌の法堂都管兼戒会中直壇、十八年一月十三日に能本山大禅師の巡化侍者、愛知県第一号曹洞宗務支局事務取扱などを務め、大正七年十二月二十四日に示寂した。(『洞上高僧月旦』)

あしうらーもくおう 蘆浦黙應

一 天保二年(一八三一)―明治二十六年

(一八九二)

兵庫県川辺郡福祥寺六世、三田市心月院二十一世。号は機外、別号を愷雲。天保二年十一月二十二日に周防玖珂郡今津邑の岩国藩土蘆浦次右衛門の四子に生まれる。受業師は立文字禅。本師は宜参黙禅。天保十年(一八三九)春、岩国市大応寺の万仰について沙弥となり、仏教を学ぶとともに藤村三貞について漢字を学んだ。十一年、松山市の宝林寺の愚囑に参じて『正法眼蔵』を書写し、十三年万仰の導きで岩国市の洞泉寺の立文字禅について得度した。弘化二年(一八四五)、行脚に出て諸師に参じ、嘉永元年(一八四八)には宇治市の興聖寺の回天慧杲に参じ、その後、兵庫福祥寺に転住した師の字禅に随侍した。四年冬、亀岡市の苗秀寺の結制で鴻雪爪に参じて大悟し印可を受け、六年再び回天慧杲に参じたが、回天、字禅が相次いで遷化したため、江戸に出て施檀林に掛錫し、大訥愚禅らに学んだ。安政四年(一八五七)、法兄野坂黙禅

を大阪府池田市の陽松庵に訪ね、翌五年夏

に同寺で立身し、六年三月に黙禅の室に入って嗣法した。同年八月には摂津福祥寺に首先住職し、翌七年春に永平寺で転衣した。明治二年(一八六九)四月には心月院に転住しており、大学林教授や縮刷大蔵經校警委員なども務め、二十六年六月二十四日に六十二歳で示寂した。四十二年十一月には弘津説三によって『黙應和尚遺稿』が刊行された。(弘津説三『黙應和尚遺稿』)

あじおかーぶんりゅう 味岡文龍

一 明治元年(一八六八)―昭和十八年(一

九四三)

名古屋市香積院十八世、尾西市鳳洲寺六世。号は旭山。明治元年十一月十五日に愛知県の小木家に生まれる。受業師は孝岳文忠。本師は本田賢光。明治十五年(一八八二)八月から十七年二月まで愛知県日進市の龍谷寺に安居し、十七年三月から二十年十月まで、二十一年三月から二十四年八月まで、二十五年三月から二十七年八月までは石川県金沢市の天徳院に安居し、押野太

寿の侍者を務めた。三十年一月に香積院へ  
住職し、大正三年（一九一四）に辞職した  
が、六年七月二十五日には再任職した。昭  
和十八年六月二十六日に七十六歳で示寂し  
ている。

あしかが 一 つみょう 足利哲苗

文化八年（一八一二）―明治二十年（一  
八八七）

府中市高安寺二十六世、東京都観栖寺十九  
世。文化八年四月八日に古河藩土宮本準人  
の子として江戸に生まれる。受業師、本師  
は祖岩哲道。号は祖傳。文政六年（一八二  
三）十三歳の春、哲道の弟子となり、天保  
五年（一八三四）に西多摩郡の明白院へ住  
職して法幢をたて、ついで南多摩郡恩方村  
の観栖寺に移り、本堂を再建した。弘化元  
年（一八四四）八月に三十四歳で高安寺に  
転住した。当時の高安寺は財政が悪く、住  
職の移動も激しく諸堂の荒廃ははなはだし  
かったが、哲苗は諸堂の営繕や整備を行っ  
て多くの徒弟を養成した。野村瓜州ら文人  
墨客との交遊があり、明治十五年（一八八

二）には曹洞宗大学林の開校式に列席して  
紫幕の寄付者に加わり、十八年に高安寺を  
退董し二十年三月二十五日に七十七歳で示  
寂した。〔高安寺もの語り〕

あしざわ 一 せきじょう 葦澤碩定

元治元年（一八六四）―明治三十八年  
（二九〇五）

長野県上水内郡長秀院二十二世、長野県常  
松寺十四世。号は禅山。本師は祖峰堅宗。  
元治元年六月十五日に長野県上水内郡豊野  
町の栗田弥惣治の二男に生まれる。弟子に  
仁、義、礼、智、信の五定を教え、地方の  
名刹に法縁を厚くした。明治三十八年十月  
六日に五十歳で示寂した。

あしな 一 しゅんせい 葦名俊清

明治四十一年（一九〇八）―昭和六十二  
年（一九八七）

仙台市妙心院三十四世。宮城県栗原郡館山  
寺二十九世。多賀城市法性院兼務住職、  
七ヶ宿町東光寺兼務住職。号は大智。明治  
四十一年一月二十日に仙台市に生まれる。

受業師は三宅俊雄、本師は葦名徳隣。昭和  
五年（一九三〇）三月に曹洞宗立梅檀中学  
校を卒業し、十五年九月十六日に永平寺に  
瑞世、同十七日に總持寺に瑞世した。十六  
年十二月十七日に栗駒町館山寺に首先住職  
し、二十年九月に東北学院高等商学部を卒  
業した。二十年十一月から宮城県宗務所に  
勤務し、二十四年一月には宮城県宗務所  
事、二十九年一月に梅檀学園学監を務め  
た。三十五年十月には仙台市新寺小路地区  
区画整理審議会審議員、四十四年九月には  
梅檀学園東北福祉大学評議員、四十九年十  
一月より五十三年十一月まで宮城県宗務所  
長を二期務めた。五十一年二月には曹洞宗  
東北管区長を二期務め、五十二年十一月に  
は宮城県宗教学法人連絡協議会会長を二期務  
めている。五十三年三月には宗門護持会副  
会長を、五十四年二月には東北福祉大学理  
事、五十四年三月に全国宗務所長会会長を  
務め、五十六年六月に曹洞宗宗務所副会長、  
五十七年十二月には曹洞宗宗務所出版部長  
などを務めた。六十一年六月には仙台市市  
政功労者の表彰を受け、六十二年十月十四

日に八十歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』、「本葬菜」)

あしはらぎつてい 足羽雪艇

明治二十年(一八六九)―昭和三十年(一九五五)

鳥取県気高郡中興寺二十世、鳥取県八頭郡龍徳寺二十五世、兵庫県氷上郡圓通寺四十三世、神戸市福昌寺八世。号は黙庵。明治二十年二月四日、鳥取県東伯郡上北条村に生まれる。受業師は松井黙霆、本師は福井適水。三十三年(一九〇〇)二月十五日、兵庫県永源寺の松井黙霆について得度し、三十五年二月より三十七年一月まで可睡斎僧堂に安居する。三十七年一月に愛知県の曹洞宗第三学林第一学年に編入し四十一年に卒業した。同年九月には東京の曹洞宗大学に入学し、大正二年(一九一三)七月に卒業した。また、同年九月に京都帝国大学文科哲学部に入学し、四年十一月に退学した。五年十一月から七年十一月まで永平寺に安居し、丘宗潭について『正法眼蔵』を参究した。丘宗潭示寂後は岸沢惟安につい

て『正法眼蔵』を参究している。明治四十三年に名古屋市万松寺の吉川義道について立身し、大正五年三月一日に大阪府長徳寺の福井適水の室に入り嗣法した。翌六年十一月四日には永平寺で瑞世している。昭和八年二月二十三日に鳥取市天徳寺専門僧堂の准師家、十八年二月十七日には神戸市満福寺禅林の師家、十一年四月二十三日には永平寺の眼蔵会講師になり、十五年十月五日には永平寺後堂職に就任した。二十八年六月には再び永平寺眼蔵会講師を依頼され、三十年四月十一日に六十九歳で示寂した。(『足羽雪艇全集』)

あしはらぎしょう 葦原義正

大正二年(一九一三)―昭和四十四年(一九六九)

あしはらぎしょう 葦原義正  
大正二年(一九一三)―昭和四十四年(一九六九)  
山形市長源寺三十世。号は諦観。大正二年十月二十四日に山形市七日町に生まれる。本師は葦原義道。昭和十一年(一九三六)駒澤大学仏教学科を卒業し永平寺に安居する。宗務院書記、教区长、大遠忌県支部督励委員、山形県第一宗務所長、山形市市会

議員、民生委員、児童委員、少年司法保護司、町選挙管理委員長、町各宗仏教会理事長、慈眼寺日曜学園長などを務めた。昭和四十四年一月十三日に五十五歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』、「傘松」第三一五号)

あしはらぎどう 葦原義道

明治十七年(一八八四)―昭和三十二年(一九五七)

あしはらぎどう 葦原義道  
明治十七年(一八八四)―昭和三十二年(一九五七)  
山形市長源寺二十九世。号は泰嶽。明治十七年十二月一日に生まれる。本師は葦原道円。明治三十七年(一九〇四)曹洞宗第二学林を卒業し、四十四年(一九一一)に曹洞宗大学を卒業した。同年に長源寺へ住職し、龍源寺兼務、慈眼寺代務を務めた。曹洞宗宗会議員、宗会議長、永平寺顧問を務め、東北地方における宗門の重鎮の一人であった。昭和三十二年十月九日に示寂したが、永平寺より監院位を贈られている。(『曹洞宗現勢要覧』、「傘松」第二五七号)

あしべーけんぜん 芦辺鎌禪

大正三年(一九一四)―平成十年(一九九八)

東京都世田谷区耕雲寺六世、愛知県豊川市安昌寺三世、埼玉県三郷市慈眼寺二十世。

号は立道。幼名を「武」といい、後に「鎌禪」に改名した。大正三年一月十二日に京都市下京区紛川町の芦辺竹二郎の長男に生まれた。受業師は福山白麟、本師は福山界珠。昭和十一年(一九三六)三月に駒澤大学専門部仏教科を卒業し、十一年四月に永平寺に安居した。二十年十一月より豊川稲荷東京別院執事、永平寺布教部長、永平寺門僧堂視學員、布教教化審議会委員、参禅道場師家会副会長、駒澤大学評議員、駒澤大学駒澤会会長、駒澤大学野球部OB会名誉会長などを務めた。四十年より耕雲寺で仏教文化講話会や参禅会を開催している。著書に『煩惱に遊ぶ』『仏壇供養のわかる本』などがあり、機関誌「耕雲」を発刊して布教にあたった。寺域を再度移転して本堂再建、伽藍復興事業に務め、平成十年十

一月二十一日に八十四歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』、「傘松」第六六四号)

あすきーそどう 遊城祖道

天保五年(一八三四)―明治三十二年(二八九九)

大宮市高城寺十五世、大宮市東光院十七世、川越市正光寺。号は覚城。天保五年埼玉県に生まれる。受業師、本師は祖英。明治十九年(一八八六)六月、曹洞宗専門支校学課第五級を卒業する。慶応三年(一八六七)七月に任職以来、寺子屋を開き児童の教育に尽した。明治五年学制が發布された時、六十名ほどの生徒を引継がれたといわれ、翌六年六月一日より本堂を校舎として学校を創設した。それを遊馬学校と称し、校章には寺紋の五七桐を用いた。特に地区社会教育に尽瘁した。明治三十二年五月二十四日に六十八歳で示寂している。

あずまーけんえい 東憲英

明治二十九年(一八九六)―昭和四十年(二九六五)

松江市桐岳寺二十四世、松江市宝林寺十五

世、島根県飯石郡万善寺二十一世、松江市安養寺七世、島根県簸川郡潮音寺。号は覚

雄。明治二十九年一月一日に島根県邑智郡

高原村大字高見の東国成の三男に生まれる。本師は慧光泰憲。名古屋市円通寺、島

根県退休寺の陸鉞巖に随侍する。管内布教師、島根県第二宗務所長、松江刑務所教誨

師、方面委員、社会教育委員、民生委員、

山陰家庭学院常置評議員などを務めた。昭和四十年二月十四日に七十歳で示寂した。(『洞門龍象要覧』)

あずまーけんりゅう 東賢隆

明治十年(一八七七)―大正十五年(一九二六)

東京都多摩市高西寺二十一世、東京都多摩郡清光院。号は紹山。明治十年五月十四日に秋田県由利郡下濱村に生まれる。受業師、本師は東賢英。二十三年(一八九〇)四月に清光院の東賢英について得度、二十七年夏に普門院の松戸祖栄について立身、同年八月に東賢英の法を嗣いだ。高等中学

林、日本中学校国学院、学習院高等部に学んだ後、東京帝国大学に入学し、政治法律を学んだ後に哲学科を修了する。この間、

根本通明に随って漢学も研鑽した。三十一年四月、永平寺で転衣し、三十二年一月には清光院に首先任職した。大学を卒業するや支那留学生收容の学校を起して活動したが支那事変のために頓挫した。稀にみる才子と称されたが、大正十五年十月十一日に南洋麻尼刺の南天寺にて病気で示寂した。〔曹洞宗名鑑〕

あずまーこうどう 東耕道

ー 明治二十四年(一八九一)

長崎県北松浦郡東光寺二十三世。号は佛圀。両親の菩提のため、平戸の勝尾岳にあった松浦家菩提寺の臨濟宗普門寺が明治維新の際廢寺となり、その本堂を金二百十円で買受け、明治十年(一八七七)四月に東光寺本堂として移転建立した。明治二十四年二月二十四日に示寂している。

あずまーしゅうこう 東秀孝

ー 明治十六年(一八八三)ー昭和三十八年(一九六三)

長野県南安曇郡の金松寺五世、長野県南安曇郡の正真院五世。号は至道。明治十六年十月二十二日に長野県南安曇郡梓川村に生まれる。受業師は東秀道、本師は東秀山。近藤秀顕や東幹雄、東健三らに参随した。

長野中学校を卒業後、東京外国語学校に入学した。管内布教師、郡仏教会長、保護司などを務める。昭和三十八年(一九六三)十二月一日に示寂した。〔曹洞宗現勢要覧〕

あずまーそしん 東祖心

ー 明治十六年(一八八三)ー昭和四十一年(一九六六)

佐賀県小城郡福田寺徒弟。号は大応。明治十六年八月五日に佐賀県小城郡牛津町の大島家に生まれる。受業師、本師は東大心。宇治市興聖寺の西野石梁に参随した。二十九年(一八八六)八月に福田寺の東大心について得度し、同年冬、長崎県諫早市の天

祐寺松山大定の随意会に入衆し、三十七年夏、興聖寺において立身して、続いて興聖寺僧堂に五年間、大阪市陽松庵僧堂に四年間安居した。中国公主嶺市の仏心寺の初代開山で、日本人や中国人に対する布教活動及び関東軍軍人に対する参禅指導を行った。昭和四十一年十月二十六日に八十四歳で示寂した。〔曹洞宗名鑑〕